

コスモスの回復

——プラトン『クリティアス』における自然環境荒廃の原因——

瀬 口 昌 久

<序>

『ティマイオス』の続編として構想され、『国家』とも内容的に密接な連関をもつ『クリティアス』は、プラトンの最晩年に書き始められ、残された著作のなかで唯一未完のままに終わっている。その『クリティアス』（以下、*Criti.*と略記も併用）において、かつて豊かであったアッティカ（アテナイを中心とするギリシア中部の南東に突出した半島部）の国土や自然が痩せ衰えて荒廃したとプラトンは記している。この小論は、そのアッティカの自然荒廃の原因をプラトンがいかに考えていたかを明らかにし、その解釈を起点としてプラトンの哲学がエコロジカルな問題にどのような示唆を提示しうるかを論じたい。

<1>

プラトンがアッティカの国土の荒廃について論じているのは、次の箇所である。

(P) 「そこで、往事に比べると、小さな島々でよく見かけることだが、現在の国土の姿は、まるで病人の身体が骨ばかりになっているように、肥沃で柔らかな土壌は、ことごとく流失し、痩せ衰えた土地だけが残されたのである。だがかつての国土はまだ損なわれていなかったのだから、山々は土におおわれた高い丘陵をなし、今日『石の荒野』と呼ばれているところには肥沃な土壌に満ちた平野が広がっていて、山々には豊富な森林資源があった。この点については、今なお明かな証拠がある。すなわち、今ではせいぜい蜂たちを養うにすぎない山々であるが、その山々から大建築の屋根を

茸くための樹木が伐り出されのは、さして遠い昔のことではなく、葺かれた屋根は今も堅固なままである。その他にも多くの栽培果樹が高々と生い茂り、また家畜にも食べ尽くせぬ牧草をもたらしていた。さらにそのうえ、国土は毎年、ゼウスからの雨水を喜び、今日のように裸の大地から海へすぐにその雨水を流失することもなかったのだ。国土には、豊かな土壌がありその中に雨水を受け止め、保水性のある粘土質の土壌によって蓄えられ、高地で浸透した雨水を窪地へと流し、いたるところに泉や川の豊かな伏流を提供していた。以前にはあった流れの辺りには、そうした流れに捧げられた社が今もなお残されている。それが国土について語られた今の話が真実である証拠である¹⁾」(Criti. 111b4-d8)

すぐれた西洋古代史学者である藤縄謙三氏は、以上の「プラトンの推理は鋭利なもの」であるとしながらも²⁾、まず、降雨に対する森林そのものの保水作用を補う必要があると指摘する。「激しい雨が降った場合、雨水は葉や枝や幹を伝って徐々に地表に達し、そこで落葉の層に吸収され、やがて土中へ浸透する」保水作用である。だが、より重要な問題は、かつては豊かであったアッティカの国土が痩せ衰えた原因をプラトンがいかに考えているかである。プラトンは上記の箇所の直前で次のように記している。

(Q) 「われわれの国土は、全体が大陸から長く突き出て、岬のように海に横たわっており、これを三方から器のように囲む海は、たまたまどこもたいへん深い。それで九千年の間に、——あの当時から今日までには、すでにそれほど歳月がたっているわけだ——いくたびも大洪水に襲われたが、そのあいだに起こったたびかさなる災害によって高地から流れ出た土砂は、他の地域のように、語るにたるような沈泥とはならず、その度ごとに渦を巻いて流れていき、海底の奥深くに消え去ったのであった」(Criti. 111a6-b4)

この記述から、プラトンが大洪水という自然災害とアッティカの海域を含む自然的地形に土壌流失の原因を帰していると藤縄氏は認定する。現代の私たちならば、大雨や洪水が荒廃の根本原因ではなく、森林の濫伐によって、土壌の流失が起こったと考えたと考えると藤縄氏はつけ加えている。アテナイの市街部

を襲った大雨の記述はそうした解釈を強く裏づけるように見える。

(R) 「まず、アクロポリスの状況についてであるが、当時と今とはかなり様子が違っている。というのは、ある夜、ものすごい大雨がアクロポリスを襲って土砂を洗い流すとともに、地震とデウカリオンの大災害から逆算して三つ目にあたる大洪水が一度に起こって、一夜にして現在のような荒涼たるありさまにしてしまったからである」(Criti. 111e6-112a4)

以上の記述を考慮すれば、藤縄氏が指摘するように、アッティカの自然の荒廃は、大洪水という天災とアッティカの海域を含む地形とに原因があり、プラトンが森林濫伐と土地の浸食との因果的なリンクを認めていた明確な証拠はないように思われる。

しかしながら、プラトンの記述をよく読めば、アッティカの大地の荒廃を、単に地理学的条件と自然の猛威による結果だとプラトンが考えてはいないことがうかがい知れる。(R)で述べられたアクロポリスの地形を大きく変えてしまうような大洪水の後にも、アッティカ地方には、(P)で述べられているような豊かな国土が残っていたと考えられるからである。なぜなら、(1)「山々から大建築の屋根を葺くための樹木が伐り出されのは、さして遠い昔のことではなく、葺かれた屋根は今も堅固なままである」(2)「以前にはあった流れの辺りには、そうした流れに捧げられた社が今もお残されている」と述べられているからである。もしも、(R)で示唆されるような歴史的な大洪水が(P)で述べられているアッティカの肥沃な土地の原因であるなら、当時の建築物や、山間部を流れる川の近くに建てられた社までもが残っているとは、とうてい考えられない。藤縄氏もこの(1)と(2)のプラトンの記述を根拠に、(P)で述べられるアッティカの荒廃は、「精々この百年か二百年の間に起こったことだと考えざるを得ない」と推察している。ここから最も合理的に導き出せる結論は、九千年の長きに渡ってアッティカの国土の浸食は進んだにせよ、Goldinが主張するように³⁾、(R)で述べられるような最後のcataclysmicな大洪水の後にも、アッティカの山々には、まだ豊富な森林資源とそれを支える豊かな土壌が残されていたとプラトンが考えていたということである。

では、天変地異とも呼べる破局的な大洪水が、(P)で述べられるアッティ

カの肥沃な土壌の流出でないとするれば、「国土は毎年、ゼウスからの雨水を喜び、今日のように裸の大地から海へすぐにその雨水を流失することもなかった」という国土の荒廃の原因は何か。毎年の平均的な恵みの雨を、土壌の流出につながる慢性的な水害に変えた要因として、森林の大規模な伐採を含むような何らかの人為的な原因をプラトンは推察していたのではないか。国土への人為的働きかけの重要性を示唆するのが、(P)直後の以下のような記述である。

(S)「その他の地域の国土は、自然本来において (*physei*) はそのようであって、農作業だけに従事する真の農夫たち、つまり美を愛し生まれついでての適性をそなえた農夫によって、美しく秩序づけられていた (*diekekosmēto*) のであろう。彼らは、最善の大地と尽きることない豊かな水を持ち、地上では最も温和な気候に恵まれていたのである。」(*Criti.* 111e1-5)

アッティカの豊かな国土は、すぐれた農夫によって秩序づけられることによって保全されていたと考えられている。自然環境の調和を保つためには、自然環境を整備し秩序づける人間の働きが重要であることが明確に認識されている (Cf. *Criti.* 118c)。先に挙げた Goldin は、こうしたエコロジカルな問題をプラトンは他のどこでも取り上げていないとした⁴⁾。しかし、それは誤りである。プラトンは『法律』において、あるべき国家の国土の整備について次のように述べているからである。

「またゼウスからの雨水が山の高みから山間の落ち窪んだ谷間へと流れ込むときに、国土に害をなさず、むしろ利益をもたらすようにと、水の溢出を堤防や堀で防ぎます。こうして谷が雨水を受け入れ、呑みこんで、下流のすべての畑や土地のために、流れや泉をつくり、最も乾いた土地にさえ、たくさんのよい水を供給するようにします。湧き水については、流れであれ、泉であれ、植樹や建物で美しく飾り整え (*kosmountes*)、地下の水路をつくってこれらの流れをつなぎ、たくさんの水をため、もしそのあたりに神に捧げられた聖なる森か神域があるならば、水路をつくって神々の社のなかにまで四季を問わず水を送って、それらを美しく整えます (*kosmō-*

si)」（『法律』 6 卷761a6-c5）

『法律』のこの箇所が明確に示しているのは、山間部や高地に降る雨水をコントロールすることが、国土や農耕地の保全と整備にきわめて重要であるとプラトンが考え、堤防や堀や水路などの土木工事や植樹をも含めた治水管理の必要性を認識していることである。また『法律』8巻では、農業用水の使用規定（『法律』844a-d）を定め、水が作物にとって最も重要であり、かつきわめて「汚染されやすい (eudiaphtharton)」ので、「薬物 (pharmakeusesin)」などによって水に損害を与えた者への罰則と補償を義務づけている（『法律』845d-e）。『クリティアス』で述べられた真の農夫たちの仕事には、『法律』のこうした箇所を示されたような畑や土地のための治水管理が密接に関わっていると考えられるであろう。また水と肥沃な土壌と樹木の密接な関係は、「ポセイダンの聖林」では、泉の水と肥沃な土地によって多種多様な樹木が立派に育っているという記述（*Criti.117b-c*）においても示唆されている。そして、両対話篇の並行箇所に共通するのは、*diakosmeō*, *kosmeō* という *kosmos*（秩序）を与え、美しく秩序づけるという言葉が共に見いだされるように、人間が自然世界を美しく秩序づけるという考え方である。「プラトンの考えのなかには、人間が自然を保護したり再編したりする特別な責任をもつという観点はない」といった主張⁵⁾は、このようなプラトンのテキストを無視したまったくの誤りといわねばならない。

〈2〉

人間が自然を秩序づける営みが国土の保全にとって重要であるという認識が、人間のそうした営みが壊れた時に、国土の荒廃が起きるという考え方につながるのはきわめて自然である。そして事実、プラトンは、破局的な大洪水が惹き起こされる原因そのものを、自然の単なる偶然的な振る舞いではなく、人間の欲望の肥大化が招いた人間の墮落した振る舞いへの神罰に求めている。

「しかし彼らに備わっていた神的な部分が、多くの死すべき人間との度重なる交配によって消え失せ、人間的習性が支配するようになると、彼らは

ついに富の重みに耐えかねて見苦しく振る舞うようになり、洞察力ある人には、醜悪に見えるようになった。それは彼らが最も貴重でこの上なく美しいものを失ってしまったからなのだ。しかし、真に幸福な生き方を悟ることができない連中には、何にもまして、たいへん美しく幸いであるように思えたのである。彼らが不正な貪欲と権力とに満たされていたからである。神々の神であるゼウスは、法に基づいて支配される神であり、そのようなありさまを見ぬく力をもっておられるので、すぐれた種族が見下げ果てた哀れな生を送っているのを心にとめ、彼らをより調和がとれ節制のある者にするために、罰を与えようとお望みになった。そして、すべての神々を残らず、かしこに集めたもうた」(C_{riti}.121a8-c2)

旧約聖書の「ノアの箱船」物語のように、古代ギリシアにも、ゼウスが怒って大洪水で人間を洗い流そうとしたときに、プロメテウスの息子のデウカリオンとエピメテウスの娘のピュルラが、箱舟をつくって難を逃れたという有名な物語がある(『ティマイオス』22b, C_{riti}.112a)。大洪水の原因は墮落した人間を浄めるための神罰であるとする古代世界に共通するモチーフを、プラトンも『クリティアス』の枠組みとして採用しているのである。

また、「人々が徳を失い、富ゆえの贅沢によって自制心を失い、われとわが身を滅ぼす」(C_{riti}.121a)という『クリティアス』に示された国家破綻のシナリオは、プラトンの政治哲学を貫く、病んだ国家に対する基礎的診断である。プラトンは『国家』篇において、「最も必要なものだけの健康な国家」(『国家』372d)が、「熱でふくれあがった病気の国家」に変貌する起動因として、国家にとって害悪の最大の原因を次のように見定めている。

「われわれはさらに戦争の起源となるものを発見した、すなわち、国々にとって公私いずれの面でも害悪が生じるときの最大の原因であるところのもの、そのもの(財貨を無際限に獲得することに夢中になること)から戦争は発生するのだ、と」(『国家』374e)

人々が貪欲にかられて欲望的部分を限りなく肥大させることが、領土拡大の要求と国家間の戦争を生み出す。そして、古代ギリシアでは、戦争の遂行にあたって、大量の軍船建造のために森林資源はもっとも激しく消費された

のである⁶⁾。また、化石燃料や金属製品が豊富ではなかった古代世界においては、木材こそが、建築、道具、機械、輸送手段、燃料などあらゆる用途にとって最も基礎的で重要な物質資源であった。森林や木材を示すギリシア語の *hylē* という言葉が、*substance* や *material* の同義語とされてゆくには、木材の物資としての重要性が反映されているとも考えられるだろう⁷⁾。人々が節制を失い貪欲さによってゼウスの神罰を招くという『クリティアス』の物語の文脈において、森林が大建築のために伐採されたことに対するプラトンの評価は、価値的に決してニュートラルではないといわねばならない。かつての正しく統治されていた頃のアテナイでは、人々は自分たちの共同住宅を金や銀で飾り立てることはせず、決して豪華ではない建物をそのまま維持管理して代々譲り渡して住んでいたことが、その後の時代と対比的に述べられてもいるのである (*Criti.*112b-c)。

さらにまたここで、『国家』の上述の引用箇所注目することは、エコロジカルな観点からも意義深い。それはプラトンが、「最も必要なものだけの健康な国家」を理想の国家として扱ってはいないことである。麦のパンを主とし、野菜のおかずは無花果や豌豆をデザートにしたベジタリアンの食事をし、樅の実を肴に適量の葡萄酒を飲み、蔓草をひいた床で寝る。戦争や貧乏を気にせずすむ、そうした「健康な国家」の平和な暮らしぶり(『国家』372a-d)は、古代版の『森の生活』を思わせる。しかしながらプラトンは、ソクラテスに最初に語らせた簡素な生活を基にする国家を、すぐさま対話者のグラウコンに「豚の国」と呼ばせている。大多数の人間には、質素な生活への逆戻りに満足できないことをプラトンは十二分に認識している。ひとたび贅沢な生活を知った大衆が、そうした生活を自らすすんで捨て去り質素な生活を選択することは、限られた少数の賛同者を除けば、きわめて可能性が低いのは今日においても同じであろう。プラトンは、「豚の国」への不可能な帰還をすすめるのではなく、贅沢で膨れ上がった病んだ国家の現実を冷徹に見すえたうえで、国家をいかに節制ある美しい秩序(コスモス)のとれた国家へと再編しうるかを『国家』の主題にしているのである。現在の地球環境破壊の問題も、もとをただせば人間が豊かさや富を飽くことなく求めることに起因するのであり、その問題への対処は、プラトンの「哲人統治」思想の課題に今日においても深い連関を持っているといわねばならない。

〈3〉

しかしながら、エコロジストの中からは、プラトンへの根強い批判が執拗に現れてくる。典型的な例として Hargrove によると、プラトンが『クリティアス』で、森林伐採が環境に及ぼした影響を観察しながらも、それには「関心がない (unconcerned)」のは、「プラトンがとくにパルメニデスやピュタゴラスといったソクラテス以前哲学者から受け継いだ形而上学、すなわち自然世界は幻想であり、いかなる根本的な意味においても存在していないという見解」の結果であるとしている⁸⁾。また進化論生物学者である Mayr は、生物学の全歴史を、プラトンによってうち立てられた「实在論 (essentialism)」との闘いとみなしている。幾何学を重視して、現実の生物や植物の観察を軽視し、それらをイデア的真實在の不完全なコピーとみなすプラトンの实在論こそ、生物学の発展を著しく阻害したものであり、Mayr はプラトンを「生物学にとっての disaster」とまで呼んでいる⁹⁾。

こうした批判はプラトンが『ティマイオス』において、イデア論に基づきながら宇宙と自然万有に与えた位置づけをまったく無視して、プラトンを批判しているとしか思えない。『ティマイオス』で描かれる自然万有の造り主は、善き造り主であるがゆえに、何ら惜しむことなく、真實在 (イデア) を範型として、自然万有をできるかぎり善く美しくなるように秩序づけたのである。『ティマイオス』のエピローグは以下の言葉で結ばれている。

「なぜなら、死すべきものと不死なるもの、どちらの生きものをも取り入れてこの宇宙は満たされ、目に見えるもろもろの生きものを包括する目に見える生きものとして、理性的対象の似像である感覚される神として、この上なく偉大で、この上なく善く、この上なく完全なものとして、この宇宙 (コスモス) は誕生したのです」(『ティマイオス』92c)

プラトンはイデア論を堅持したうえで、自然万有にその正当な位置づけを与えている。ここでは宇宙が生き物を包括することがより善いと判定されているばかりか、宇宙そのものが一つの生きものとして構想されている。自然世界や宇宙は美しく善き秩序をもち、それは知性によって知られるがゆえに知性によって秩序づけられている。そのことを突きつめれば知性にしたがって

万物が生じているのであり、そうした知性を行使するためには、知性をもつものは生きているものでなければならない。このように、「物」ではなく、生命と価値を第一義的に優先させるプラトンの宇宙論への最も適切な歴史的評価を以下に引用しておこう。

「プラトンのコスモロジー、なかんずく『ティマイオス』は、宇宙と自然万有——われわれが生きるこの世界——への賛美の書である。歴史をかえりみても、この世界に対する侮蔑的な態度が支配的であった時代に、なお自然万有の美しさへのギリシア的まなざしを人々に保持させたのはプラトン、特に『ティマイオス』であり、この書はそれゆえにルネッサンスの思想家を深く動かしたのであった¹⁰⁾」

また、Glacken も指摘するように、プラトンは『ティマイオス』において「生物の多様性」を高く評価している¹¹⁾。知性の対象となる生き物すべてを真実在が持っているように、真実在をモデルとする宇宙もすべての生物を包括していることが最も善いとされ（『ティマイオス』30c-31a）、宇宙は、知性が知りうる限りの種類と数に対応する生き物を含まねばならない（『ティマイオス』39d-e）と述べられているからである。

知性が生物の種類と数に関わることは、生物の世界もまた、知性によって知られ、「秩序あるもの」として構成されていることを意味すると考えられる。プラトンは、『プロタゴラス』において、プロタゴラスに生物の誕生にまつわる有名な神話を語らせている。神々は、土と火を材料に死すべき種族（生物）を形づくった後、エピメテウスとプロメテウスに命じて、それぞれの種族に、ふさわしい装備を整え（kosmesai）、必要な能力を分かち与えたというミュートスである（『プロタゴラス』320d-c）。たとえば、ある種には武器を与え、武器を持たない別の種には身を守る能力を与え、また小さい種には、逃げるための翼あるいは地下のすみかを与えたと語られる。そこで示されているのは、それぞれの生物が、環境に適応し、季節の循環に順応し、外敵や餌との数的バランスを保ちながら、種の保存ができるように、異なる能力がそれぞれに与えられたという考え方である。そこには、自然環境に合理的に適応できると考えられる生物だけが存在するという発想を読みとることができる。プラトンは生物を知性の対象としているのであり、そのことは

生物探求への道を示しこそすれ、現に生きている生物を軽視するのでも、われわれの生きる世界を蔑視するものでも決してない。もちろん、プラトンの生物観が進化論的であるということを私は主張したいのではない。しかし、プラトンの生物観が、「進化論」と真っ向から衝突するのは、その進化論が物質を生命よりも優先させ、生命や知性を持たぬ機械的な物質から、「自然」に、生命あるものが誕生したという見解をとる場合であろう。

「それではすべての死すべき動物およびすべての自然物が（中略）生じてくるのは、まさにほかならぬ神の製作活動によるものであると、われわれは主張すべきではないだろうか。それとも多くの人たちの通念と叫ぶ方を採用するのか、（中略）自然がそれらのものを、ひとりで働いて思考なしにものを生じさせるような何らかの原因によって、産み出すのだという考え方をだ」（『ソピステス』265c）

プラトンが、自然世界に対する多くの人々の通念に抗して求めてやまないのは、自然万有が知性にしたがう美しい秩序ある世界（コスモス）であることへの徹底した自覚と、そのコスモスを人間の営為の中に回復することである。

〈結びに〉

『ティマイオス』の美しく善き自然万有のコスモロジーの成立の後を受けて書かれた『クリティアス』において、プラトンは人間の本来の営みとして、自然環境世界を善く秩序づける働きを求めている。人間が魂の秩序を失い欲望を肥大化させることが、自然の荒廃と秩序破壊の原因になると考えられているのである。今日私たちは、多様な生物をはぐくみ水質の浄化作用をもつ干潟を危険な廃棄物で埋め尽くし、環境との調和をうたいながら森林を大規模に伐採し、膨大なエネルギーを消費することで、地球の生命全体を危機にさらす大気圏の破壊や気候条件の変動を惹き起こしている。ゼウスが裁きのためにすべての神々を召集する声が、私たちが顧みないコスモスには、すでに鳴り響いたのだろうか。『クリティアス』はまさにその場面で筆が断たれ、未結のまま私たちに残されている。

註

- 1) 以下、プラトンの引用は、岩波版プラトン全集訳を基本とし、ギリシア語原文と参照して筆者にとって必要と思われる改訳を行った。ご容赦をこう。
- 2) 藤縄謙三、『ギリシア文化の創造者たち』（筑摩書房、1985）、p.237以下
- 3) Goldin.O., “The Ecology of *Critias* and Platonic Metaphysics” in *The Greeks and the Environment* edited by L. Westra and T. M. Robinson, 1997, pp.73-80
- 4) *Ibid.*, p.78
- 5) Tress. D. M., “The Philosophical Genesis of Ecology and Environmentalism” in *The Greeks and the Environment* edited by L. Westra and T. M. Robinson, 1997, p.41
- 6) 藤縄, 前掲書, p.218-236参照
- 7) Cf. Hughes. J. D., *Pan’s Travail: Environmental Problems of the Ancient Greeks and Romans*, 1994, pp.73-74
- 8) Hargrove. E.C., *Foundations of Environmental Ethics*, 1989, pp.29-30
- 9) Mayr. E., *The Growth of Biological Thought, Diversity, Evolution, and Inheritance*, 1982, pp.38-39, p.87, pp.304-5. また彼のそうした見解は Bowlerによっても支持されている。Bowler. P. J., *The Environmental Sciences*, 1992, p.35. 進化論生物学者にとって「实在論者」「本質主義者」のプラトンは、極めて評判が悪い。進化生物学者の第一人者であり、科学エッセイストとして広汎な読者をもつグループも同様である。Gould. S. J., *The Flamingo’s Smile*, 1985, p.161. 邦訳『フラミンゴの微笑』（1989）、早川書房、上巻、p.207参照。
- 10) 藤澤令夫、『プラトンの哲学』、岩波新書、1998年、VI章「美しく善き宇宙」、p.209. プラトン哲学の全体の筋目を明確にした文字通り最も優れた案内書である。
- 11) Glacken. C. J., *Traces on the Rhodian Shore: Nature and Culture in Western Thought from Ancient Times to the End of the Eighteenth Century*, 1967, p.5-6